形成しているという説に対して必ずしもそうではないことをデータにもとづき論証しつつ，そこに前近代の「儒医」モデルという参照枠を挿入することによって，丸山眞男の日本思想における「執拗低音」説を援用しながら，新たなテーゼを提唱している点はきわめて意欲的でかつ学ぶところが多い．

他にも論及すべき点は多いが，望蜀のごとき要望を述べれば，こうした固有の論点に沿った論考集としての医学教育史も壮挙であるが，新村拓氏によってなされた古代の典薬寮における医療官人制から，戦後のインターン闘争や大学紛争，そして現代の医学部入学制度問題までを包括した通史的医学教育史が編者の手によって編まれることを願うのは評者のみではないだろう．ぜひとも実現してほしいと念ずるものである．

（瀧澤　利行）

［法政大学出版局，〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3　法政大学九段校舎内，TEL. 03（5214）5540，2019年3月，A5判，600頁，6,400円＋税］

書籍紹介

W. J. ビショップ 著，川満富裕 訳
〈改訳 新版〉『外科の歴史――近代外科の生い立ち――』

William John Bishop の The Early History of Surgery は1960年の初版になる評価の高い原著であり，川満富裕氏により2005年に『外科の歴史』として訳出され日本でも出版されていた．今回，川満氏は改訳新版『外科の歴史』―近代外科の生い立ち―として再版されたので紹介したい．W. J. ビショップ（1903–1961）はロンドン図書館，ロンドン王立内科協会，ウエルカム医学史図書館開設などに活躍した司書，書誌学者である．川満氏は前訳時の不十分であったところや，悪訳を全面的に改訳して今回の出版を行ったとしている．紹介者は初訳出版本も所持している．ビショップによる10章からなる細部の訳出の変化を述べることは出来ないが，現代の外科の隆盛に先立つ，近代までの外科の医学史における位置づけを考えるには良い著作とかんがえる．訳者は今回の出版に当たり「あとがき」に於いて，前版にはない「外科革命」，そして現在の「第二の外科革命」についてふれている．医学史・医史学を学び研究しているものにとっては，こちらの方への研究志向がこれからふかまってくることであろうと考えるが，外科発展の前提となった事を理解しておくには大変に良い，おもしろい，そして人類と社会の歩みの理解に有意義な歴史書の出版と考え紹介する．今回の出版に於いて「訳注」「原著における引用文の出典」「原著文献」「事項索引」「人名索引」が充実されたことを付記しておきたい．本書は次の各章から成る．

第一章　外科の夜明け
第二章　古代オリエント
第三章　古代ギリシャと古代ローマ
第四章　中世ヨーロッパ
第五章　ルネッサンス
第六章　十七世紀
第七章　十八世紀
第八章　十九世紀前半
第九章　疼痛と感染の克服
第十章　リスター以後の手術

（渡部　幹夫）

［時空出版，〒112-0002 東京都文京区小石川4-18-3，TEL. 03（3812）5313，2019年3月，A5判，320頁，3,200円＋税］